

クナシリ・メナシの戦いについて(6)

はじめに

今回も、新井田孫三郎が記した「寛政蝦夷乱取調日記」から、助命された飛騨屋久兵衛の手代で、南部大畑村の傳七と吉兵衛の2名の「申口(証言)」を見て行きます。取り調べは、「つかまふ(根室市近郊)」に到着した翌日の寛政元年(1789)7月9日に行われました。

吉兵衛の申口

この春3月中、商売筋のため傳七と同船して「くなしり」の「ふるかまふ」へ参上し、4月になって私は同所の「きなかえ」の番小屋に居りました。その節、傳七が運上屋へ用事が御座いまして出かけられました。留守中に何かと「心本(元)なく(気掛かり)になりました。5月8日に私は「ふるかまふ」へ見届け(確かめ)に参ったところ、



マメキリを始め、数多の夷共が寄合(集まって)、稼ぎ方3名と運上屋稼ぎ方1名の都合4名を打ち殺し、家財は言つに及ばず、諸色(交易の品)も残らず乱暴し、その上マメキリは私を捕え、彼の家に引き連れて行き、足かねを掛けられて3日間差し置くと申しました。そこで、傳七に対面上、「何様とも夷共存分に相成(あいな)りますと申し上げると、ようやく心を得られて、蝦夷共を付けて傳七のところへ同月10日に私を連れて行き、傳七と対面いたしました。私は傳七と終始一所に居りましたので、同人の申上げた事に少しも相違は御座いませぬ。

傳七・吉兵衛の申口

この春3月中、商売筋のため「くなしり」の「ふるかまふ」へ参上し、その時に伝え聞きますには、近年「當嶋(クナシリ)」で「鱒(マメキリ)」が始めました。私(傳七)が始めずかの「分米(分米)手当(「で)召し使われていたので、一向に「自分稼ぎ」が出来ない状況でした。荷物はむろん、日用の賄(ま)いまで出来兼ねており、「御土産(おみやげ)等もただけず「難(なん)波(な)なり、妻子に分け与えることも出来ない状況であったので、この春より、蝦夷共は「銘々稼(めいめい)ぎ」に働くなどと、正月頃より「夷共談(えいご)合(あ)して」ございましたことを、同所へ参った初めより伝え聞いていました。

そうした折、5月1日頃用事があって「當嶋(クナシリ)」運上屋へ行き、同10日に帰るとき、途中「くなしり」で、マメキリが頭となり、吉兵衛を引き連れ、数多夷ども押し寄せて来

ました。マメキリが申すには、総長人サンキチが病気の節、「蝦(えい)夷(い)の酒(い)で間もなく病死し、その上、マメキリ女房も毒害で殺されたので、シャモは「敵成(てきなり)」と申して、すでに打ち殺す様子であったので、私(傳七)が申し上げたのは、自分は「悪酋(あくしゅう)長(ちやう)とともに、商売筋で先月ここに来ましたが、この嶋の様子は存じていません。しかし、どうあつても打ち殺したいのであれば、それはどの様な訳かと申したところ、マメキリの答えは、「あつけし長人」に「対面(たいめん)の上相尋(うへあひまね)」、その応答によつて打ち殺すと申されました。

その日はマメキリが付き添い、私どもを引き連れ、「ひら」へ行き、しばらく滞留しました。そして、同所から「むしりけし」の夷どもへ使者を遣わし、傳七、吉兵衛両人を早速殺すべきか否について伝えたところ、「むしりけし」蝦夷の「サト」と「シリアサマン」の

兩人から、使者によつてマメキリへ伝えられたのは、もともと傳七は長年の間、どの蝦夷に対しても大切に介抱してくれた者なので、「決て殺問敷(けつてころせぬま)と申されたので、同18日に再びマメキリの居る「ふるかまふ」へ連れ帰り、翌19日に助命となりました。「むしりけし」やその子「ニシコマツケ」に出会い、その世話になつた上、諸道具に至るまで「徒党(たうたう)の蝦夷」より取返して頂きました。

早々に「あつけし」辺りまで逃げ帰ろうといたしましたが、沿岸の各場所で騒動があつたと聞いたので、祖母・ニシコマツケ兩人の夷船で、「あつけし」惣酋長「イコトエ」を慕い「あつち(あつち)島(しま)」に渡海し、イコトエの世話で此の辺まで無難に帰り着きました。お尋ねについては、これまで見聞き致した事は包むところ無く残らず「申上(まを)候(こう)」と記されています。(続く)